



鹿毛 敏夫

豊臣秀長

2026年NHK大河ドラマの主人公、豊臣秀長は、1540（天文9）年の生まれとされます。兄秀吉の豊臣政権を補佐し、官途（名目上の役職）は美濃守、大和（奈良県）や和泉（大阪府南西部）などを統治したため、「大和宰相」の名で史料上呼ばれます。

この秀長の政権内での立ち位置と人柄を、大坂で豊臣兄弟と直接会談した大友義鎮（宗麟）が詳細に書き記しています。それは、86（天正14）年4月6日の記録で、数え年齢で義鎮57歳、秀長47歳の時のものです。

九州最大級の勢力を誇っていた大友氏でしたが、戦国時代末期に薩摩（鹿児島県）で勢力を蓄積して軍事的に北上してきた島津義久との戦いに窮します。そこで義鎮がとった対抗策が、自ら大坂城を訪れて、天下統一に向けた活動を進めていた関白豊臣秀吉に援軍を要請する一手でした。

完成間近の大坂城内で行われた秀吉・秀長兄弟らとの会談の内容と城内での見聞を、義鎮は

その日のうちに手紙に書き記し、豊後で待つ重臣たちに送っています。その書状が「大友家文書録」という影写本（写し）として東京大史料編纂所に保存されています。

それによると、建設途中の巨大な大坂城の内部について、義鎮は「御門内御普請の様子、諸国の馳走人夫、幾千万とも申すばかりなく候」と記しています。門から城内に入ると、そこでは全国から集まった人夫（労働者）たちが働いており、その数は数万人規模だったことが分かります。

その後、7歳年下の秀吉に謁見し、会談後には秀吉自らの案内で城内を見学し、茶の湯の接待を受けた義鎮は、秀吉と別れた後、「美濃守殿へ参」つていま

宗麟を感心させる接待と演出

す。城内一角の秀長の屋敷に招かれ、「殊のほかの御取り持ち、御酒など数返御まいらせ候」と、秀長と酒を酌み交わしたのです。

そして「酉の刻」（午後6時前後）に堺の宿舎に戻る際には、秀長が「はるばる宗滴（義鎮のこと）の手をたられ、何事も何事も美濃守かくのごとく候間、心安んずべく候」と義鎮に声をかけ、「諸万人の中を手を取り組んだとあります。島津軍との戦いに窮して援軍要請にきた九州一の大義鎮に、政権ナンバ12の秀長が、わざわざ数万の建築労働者たちが見ている前で手を握り、「援軍を送るので心安心を」とささやいたのです。

この秀長の接待と演出に感心した義鎮は、手紙の末尾に「宰相殿を頼り申し候はでは」と、今後の大友家は秀長殿を頼りにするべしと、豊後の重臣たちに書き伝えています。

（名古屋学院大学国際文化学部長・教授）

11月1日掲載

大友義鎮書状の豊臣秀長との会談内容を記した部分（東京大史料編纂所影写本）

大友義鎮書状の豊臣秀長との会談内容を記した部分（東京大史料編纂所影写本）